

# 神様のパズル

2008(平成20)年6月14日鑑賞(梅田ブルク7)

★★★



監督＝三池崇史／脚本＝NAKA 雅 MURA／エグゼクティブ・プロデューサー＝角川春樹／原作＝機本伸司『神様のパズル』(ハルキ文庫刊)／出演＝市原隼人／谷村美月／松本莉緒／田中幸太郎／岩尾望(フットボールアワー)／黄川田将也／石田ゆり子／國村隼／特別出演＝若村麻由美(東映配給／2008年日本映画／134分)

……角川春樹プロデューサーの獄中企画が、鬼才三池崇史監督とのタッグによって実現！「神様のパズル」とは、アインシュタインが称した宇宙創生の謎のこと。人間は宇宙をつくることができるの？ そんな問いかけに天才少女沙羅華が興味を示したのは一体なぜ……？ また、落ちこぼれロッカーの言葉が、彼女のひらめきとなったのはなぜ……？ そして、ホントに宇宙をつくりはじめた時、一体この世はどうなるの……？ そんな壮大な宇宙パニックムービーの後に訪れる、ある結末とは……？ こりゃ意外と面白い！『スキヤキ・ウエスタン・ジャンゴ』(07年)に続く、三池崇史監督作品の中ではお薦め！

## 第5章

### 映画の話題で家族団らん

#### 獄中企画とは、ちと物騒だが……

大作『男たちの大和／YAMATO』(05年)を大ヒットさせ、続く大作『蒼き狼 地果て海尽きるまで』(07年)を大コケさせたのが、映画界の風雲児角川春樹氏。そんな著名人が、2001～2004年まで刑務所で服役したのは、麻薬取締法違反の罪で有罪とされたため。人間刑務所に入ると、静かに落ち着いて思索を深めたり、企画を練ることができるらしく、角川氏が獄中で読み、映画化の企画を練ったのが、機本伸司原作の『神様のパズル』。製作費は『男たちの大和／YAMATO』や『蒼き狼 地果て海尽きるまで』に比べると格段に安いはずだが、企画のユニーク性においては、2つの大作に劣らない。

『神様のパズル』とは、アインシュタインが称した宇宙創生の謎のこと。そんな獄

中企画の監督として角川氏が指名したのは、2007年第64回ベネチア国際映画祭での受賞は逃したものの、『スキヤキ・ウエスタン・ジャンゴ』（07年）で調子に乗っている鬼才三池崇史監督。さて、三池監督は「人間は宇宙をつくることができるのか」という超難解なテーマに、どんな切り口で挑むのだろうか……？

## 市原隼人が2役をキッチリと

基一もとかずと喜一よしかずは一卵性双生児だが、母親の目には兄基一の出来は極端に悪く、弟喜一の出来は極端に良いらしい。客観的にみても、目下基一は寿司屋でバイトをしている落ちこぼれロッカーだが、喜一は名門常南理科大学の理学部に通う世渡り上手な大学生。もっとも、母親の目にはその能力差は大きい、実際の社会ではそんなに開いていないのかもしれない。なぜなら、要領よく大学での代返係を基一に押しつけ、自分は本命のガールフレンドとタイのピピ島への旅行に赴いた喜一は、ガールフレンドに振られたまま1人タイに到着。そして傷心のまま、「ゼロ」を発見した国インドに入ったが、そこでパスポートを盗まれ、全く新たな人生を歩むことになるのだから。

また、中途半端に寿司屋でバイトしているはずの兄基一には、寿司を握る才能があるようだから。さらに、喜一の代返屋だった基一が、沙羅華サラカ（谷村美月）と共に鳩村教授（石田ゆり子）のゼミに出席する中、「宇宙をつくることができる」派の貴重な戦力になった（？）のだから。そんな、能力も性格も全く異なる双子役を、芸達者な若手俳優市原隼人がキッチリと！

## 久しぶりの「ボク言葉」が新鮮！

英語は一人称は「I」だけだが、日本語は私、俺、僕などたくさんの言い方があるうえ、男と女で言い方が違うとされてきた。しかし最近、自分のことを僕と名乗る女の子が出現しているそうだが、それは若手女優相武紗季の人氣が急上昇したせい……？ 女の子が「ボク言葉」を使うのをはじめて観た（聞いた？）のは『ビートキッズ』（05年）だったが、そこで天才菅野七生役を演じた相武紗季の「ボク言葉」は新鮮で、違和感が全くなかったことをよく覚えている（『シネマルーム7』162頁参照）。それと全く同じ意味で、『神様のパズル』の中で、物理の天才沙羅華サラカが使うボク言葉も新鮮で、いかにも沙羅華にピッタリのしゃべり方。そんな風を感じる私って、どこか少しヘン……？

## 谷村美月は、いよいよ大ブレイク……？

若いベッピン女優が大好きな私が、谷村美月の名前と顔をはじめ覚えて覚えたのは『檸檬のころ』(07年)を観た時。その後、私は『魍魎の匣』(07年)、『茶々ー天涯の貴妃(おんな)ー』(07年)で、キッチリ彼女の上昇ステップぶりをチェック。

そんな谷村美月が、この映画では新たな一面をしっかりとアピールしている。新たな一面とは、第1に天才菅野七生役を演じた相武紗季と同じく、天才沙羅華<sup>サラカ</sup>役を演じたこと。映画の中で、沙羅華<sup>サラカ</sup>が「私は自分のことを天才なんて言ったことはない！」と叫ぶシーンが2度出てくるが、凡人の役者が天才役を演じるのは難しいはず。しかし、1990年生まれ、まだ20歳にもならない谷村美月が、そんな天才役をしっかりと演じている。新たな一面の第2は、スケベおやじ的視点で恐縮だが、ジャージの下から見える胸の谷間。それを見ていると、その両側の盛り上がりが相当豊かなことがよくわかる。その適度な露出ぶりは、基一がホレている美人ゼミ生の白鳥(松本莉緒)以上！ また、大嵐の中で展開されるクライマックスシーンでとりわけ目立つその胸の豊かさは、明らかに鳩村教授を演ずる石田ゆり子以上！ そんな谷村美月だから、相武紗季の大ブレイクに続いて、いよいよ大ブレイクすることまちがいなし……？

## 難しいけど、わかったような気に……？

この映画は機本伸司の原作をかなり変形して、三池崇史監督が映画化したものだが、原作者も脚本家も監督も、そしてエグゼクティブ・プロデューサーの角川春樹氏も、この映画の中で展開される宇宙の物理学や宇宙の始まり、そして「これが宇宙の成り立ちだ」というセリフや議論については、失礼ながら全く理解できていないはず。それなのに、脚本家や映画監督は、どうしてそんな知らないことを知ったかぶりでストーリー化できるのだろうか？ そういう意味では映画監督とは騙しの天才で、一種の詐欺師かも……？ もっともそのおかげで、そんなことは全くわからない私でも、映画を観ている間は何となく「宇宙の成り立ち」についてわかったような気でスクリーンに集中できるから不思議。スクリーン上に「検索」のキーが現れ、それを押すとイラスト付きでわかりやすく解説してくれるという手法は、映画づくりとしては本来邪道だが、「三池崇史監督なら何でもあり！」と許せるから不思議。『IZO(以蔵)』(04年)や『46億年の恋』(06年)は、ワケのわからない三池映画として私には拒絶反応

が強かった（『シネマルーム6』222頁参照、『シネマルーム12』299頁参照）が、『スキヤキ・ウエスタン・ジャンゴ』のハチャメチャぶりは私は大好き（『シネマルーム16』14頁参照）。それと同じような意味で、私はこの作品で角川氏が三池崇史を監督に指名したのは大正解と考えている。こ



© 2008「神様のパズル」製作委員会

の原作の映画化は、三池崇史流でなければうまくいかなかったのでは……？ そんな風に私はこの映画を高く評価しているが、気になるのは観客の少なさ。マスコミ試写を見逃した私は、久しぶりに劇場でこの映画を観たのだが、観客席はガラガラだった。ひょっとして、あの名作『蒼き狼 地果て海尽きるまで』がコケたのに続いて、『神様のパズル』も興行収入的にはダメ……？

## ■前半は学園コメディ、後半はパニックムービー、 しかしてその結末は？

三池崇史監督は、この映画を前半は学園コメディ、後半はパニックムービーと公言したそうだが、しかしてその結末は……？ 奇想天外な発想が身上の三池監督だが、この映画のテーマは宇宙をつくることができるか否かだから、その結論は後半のパニックムービーの中で出ているはず。そして、それはそれなりに面白いのだが、意外にも三池監督がこの映画では割とありきたりの結末を導いている。もちろんそれは、宇宙をつくることができるか否かという論点についての結論と、そこに至るまでの基一の奮闘ぶりと密接な関連があるのだが、それをここで明かすことができないのは当然。さて、三池崇史監督にしては意外な、ありきたりの結末とは……？ それをしっかりとあなたの目で確かめることができれば、別に宇宙をつくることが可能であろうが、不可能であろうがどちらでもいい、と納得できるかも……？

2008(平成20)年6月16日記